

今年度研修の特色

埋蔵文化財センターが自治体職員に対して行う研修は、一般研修、専門研修、特別研修の3本立てからなる。一般研修は発掘経験が十分でない職員を対象とするもので、今年度は5・6月に繰り上げて行った。専門研修と特別研修は、経験や実績がある職員に対し行う高度な、あるいは新分野に関する研修である。

研修棟の改修工事が遅れたこともあり、本年は課程数を減らし14課程を組んだ。遺跡測量、探査課程を休み、新たに生産遺跡調査・遺跡地図情報・近世城郭調査課程を設けた。

もとは希望者が多く定番だった遺跡測量、探査課程を休止した理由は、応募者の減少である。その背景には、遺跡の測量や探査を専門企業に外注するところが増えたことがある。それ自体は歓迎すべきであるが、ともに野外実習があり、ことに測量は日中に屋外で測量、夜に細かな計算といった厳しさが評判だった。厳しさが「若者」に敬遠されたとすると、喜んでばかりもいられない。

これと表裏の現象が一般研修であった。例年より約2月繰り上げたこともあって、社会人経験が2月、あるいは1年少々の研修生が定員30名の半数をしめた。学生気分が抜けない彼らには受け身の態度が強く、昨年より時間数を増やした実測実習ですら、要求が厳しく時間が足りない、と感想文にあった。

時間、すなわち勤務時間内に終るようにすべきだ、ということであろう。担当者としては、受講者が地元での発掘に困らない最低限の技術を、限られた時間で身に付けてもらうために苦慮したのだが。

「夜なべしてもやる」は、時代遅れの死語である。これからは超新々人類の時代、それを肝に銘じなければ。

新たに加えた特別研修は、おおむね好評であった。また、目的を持った研修生が多いため、一般研修のようなことは少なかった。生産遺跡調査課程では台風7号に打ちあひ、朱雀門に切り替えた現地見学でも、門の北のプレハブに閉じこめられること2時間半。講義内容は忘れても、その時の拳の雨風が研修の記憶として、残ることであろう。

(金子裕之)